

保育  
の

創意工夫

3

## 朝のお迎えの工夫

前原 寛

保育において最も重要なのは、朝の出会いであるとよく言われます。保育園では「朝の視診」という言葉がよく使われますが、それはたんに健康状態を把握するという意味ではなく、子どもの様子をうかがうと共に、いい出会いから一日を始めるという目的があります。

私の保育園で、子どもの登園時に取り組んでいることがあります。それは、保育者が率先して子どもを出迎えるということです。こう書くとき当たり前のことと思われるかもしれませんが、そこに工夫を凝らしています。

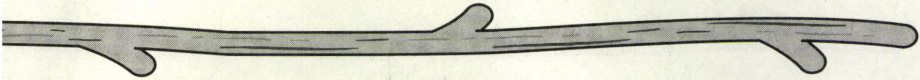
当園は、地方の過疎地域にあり、公共交通機関がありません。いわゆる車社会であり、必然的に園児の送迎は、ほぼ全員が保護者の運転による自家用車で

す。園児用の送迎バスはありません。

自家用車での朝の登園風景は、次のようなものが一般的です。保護者は駐車場に車を置き、子どもの年齢によっては一緒に保育室まで行き、ロッカーの荷物を整理し、それから子どもとバイバイをして、職場に向かっていきます。保育園の保護者は共働き家庭が多いのですが、時間帯によっては登園の車が混み合います。駐車場の狭い園では、その時間だけ園庭を駐車場として開放している所もあります。

朝は気ぜわしいものです。時間にゆとりをもって過ごしたくとも、現実にはほとんどの人が分刻みで時間に追われています。起きてから職場に着くまで、余裕をもって過ごせる人は多くないと思います。まして、子どもを保育園に送ってから出勤ということになると、時間との競争という様相を呈してきます。

ですから保護者にとって、駐車場から保育室まで子どもを連れて行くというのは、非常に気ぜわしい行動になります。さほど広くない園庭を小走りになつてしまつ保護者もいます。そんな中で、むずがる子ができます。朝からせわしなく追い立てられたあげく保育室に置き去りにされるような感じを受けてしまい、気持ちが不安定になる子どももいます。泣いたりむずがったりする子をそのままにはおけないとわかっていても、仕事に遅れるわけにはいきませ



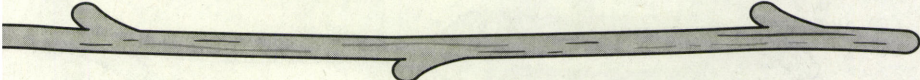
ん。後ろ髪を引かれる思いで保育園を出て行く保護者、その後追いをして泣いている子どもという風景が、ここでは見られます。

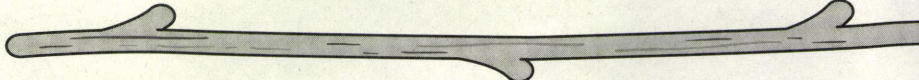
一方、保育者は早出遅出があり、担任がそのような子どもとすぐかかわれるとは限りません。保育園によつては、朝の時間帯にパート勤務の保育者が多く配置されている所もあります。それぞれの園の実情もあるのですが、子どもとの一日が朝のいい出会いから始められる、とは言い難い状況が現実にあります。

私の保育園では、それを避けるために、子どもを率先して出迎えるという取り組みをしています。

具体的にいうと、登園の車が門前の駐車場に入ってくると、すぐに保育者が車に駆け寄り、朝のあいさつをしながら子どもを受け入れます。また、その場で短時間で必要な情報のやりとりをすませます。そして、子どもは保育者と一緒に門に入り、保育園の一日が始まります。

子どもは、朝の忙しさに追われつつ来るのですが、保育園に着くとその場に待ち受けている保育者に安心して車から降りてきます。保護者もすぐに子どもを受け入れてもらえるので、必要以上に焦ることがありません。一台の車が駐車場にいる時間もわずかですみます。短い場合は、一分もかかりません。駐車場の混み合いも解消され、事故の危険性も軽減されます。





登園の時間帯は朝七時半ころから九時半ころまでですが、どの時間帯に来る子どもも、その時、すぐ対応できる保育者が車に駆け寄り出迎えます。担任が出迎えるわけではありません。保育者は、自分のクラスの子でなくても、保護者とやりとりを交わし、子どもを十分に受け入れられるように、常日ごろから把握しています。担任一人でクラスの子に対応するのではなく、保育者集団で子どもを受け入れるという体制をとっているのです。

また、朝、子どもと出会う保育者は、パート勤務ではなく正規勤務の保育者です。最も大切な出会いだからこそ、職員集団の核となる正規職の保育者がかわります。そして、出迎えの役割は、各クラスの担任だけではなくありません。正規職員であれば、障害児の担当保育者、調理担当の栄養士、主任、園長も、朝の出会いを担当します。ローテーションの兼ね合いで、子どもと保育者の組み合わせは毎日変わりますが、年間を通すと保育者はどの園児ともかわるごとになります。

社会の忙しさを肌身を感じながらも、朝の出会いを大切にし、保育園で過ごす子どもの一日がより充実したものになるように取り組んでいるのです。

(鹿児島国際大学教授・元安良保育園園長)